

（一九六一）寺村輝夫『ぼくは王さま』、古田足日『ぬすまれた町』、神沢利子『ちびっこカムのぼうけん』、砂田弘『東京のサンタクロース』、いぬいとみこ『北極のムーシカミーシカ』

という具合で、そのラインナップの確かさ、そして幅広くには今さらながら感心する。これに講談社から出された、松谷みよ子『龍の子太郎』（六〇）、安藤美紀夫『白いリス』（六一）などを加えて、たった二、三年の間に、「現代児童文学」の基本的な見取り図ができあがったのだ。明治期以降の日本の児童文学の歴史の中で、これに比定できる時期があるとすれば、『赤い鳥』に続いて『金の船』『童話』などの童話童謡雑誌が相次いで創刊された一九一八（大正七）〜二〇（大正九）年をあげることができ、言わば容れ物ができたというこの時期に対して、その後ほぼ半世紀の児童文学界をリードする書き手たちが一斉にデビューした一九六〇年前後の画期性は、この先も含めて空前絶後といつてまちがいないだろう。

こうしたことが現実となったのには、いうまでもなく内のおよび外的要因がある。というか、その両方の要因がびたりと重なったからこそ、こうしためざましい現象が可能となったのだ。内的要因としては基本的に二つ。一つは、戦時中に少年・少女時代を過ごした世代が、同人誌などに拠って、着々と創作活動を積み上げていたこと。そして

う一つは、新しい児童文学をリードすべき評論活動の活発な展開である。前者についていえば、例えば山中恒の「赤毛のポチ」は、早大少年文学会OBによって結成された同人誌『小さい仲間』への連載作品、いぬいの「ながいながいペンギンの話」は、同人誌『麦』への連載作品だった。そして、これらは、決して無名の若手たちによる水面下の創作活動というのではなく、「赤毛のポチ」が（単行本化されてからではなく同人誌連載に対して）五六年に児童文学者協会の児童文学新人賞を、いぬいが五四年に『麦』掲載の短編「ツグミ」で同賞を受賞したように、それは言わば児童文学の世界の真ん中で進行していた事象だった。

同様なことは、この時期に活発に展開されていた新しい世代による評論活動にもいえる。この時期を代表する評論グループには二つの系統があり、早大童話会による、いわゆる「少年文学宣言」（五三）を起点とする古田足日、鳥越信らの評論活動、そして六〇年に『子どもと文学』（中央公論社）として結実する石井桃子、いぬいとみこ、松居直らのグループによる評論活動であり、いずれも、旧世代からの反発も含めて、児童文学の世界で大きな注目を集めていた。この時期の評論の成果として、映画評論家の佐藤忠男の「少年の理想主義について」（五九年に『思想の科学』に発表）を並べる論者も少なくないが、その内容的意義は別として、同時代の若い書き手に対する影響力や児童